
二つの光

みつば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二つの光

【Nコード】

N4738C

【作者名】

みつば

【あらすじ】

怪盗キッドである黒羽快斗と、高校生探偵の工藤新一が、同じ大学に通う！？追われる者と追う者の、奇妙な大学生ライフ！

闇に溶けた白き罪（前書き）

本文は、新一と快斗が、高校二年生から少しばかり成長した状態からスタートしますので、ご了承ください！

闇に溶けた白き罪

突き刺すような冷たい風がふいている十二月の真夜中……深い闇夜を切り裂くように飛んでいたその白き罪人は、音もなくビルの屋上に降り立った。

そして今夜の戦利品を月にかざす。

「今日もハズレ……か……」

落胆したような……それでいてどこか諦めているような声が響く。

彼を追うパトカーのサイレンはもはや聞こえない。

彼は大きなダイヤを懐にしまうと、何か考え込むように闇夜を見つめその場に佇んだ。犯罪者のものとは思えない程の冷涼で澄んだ気を纏い、何でも見透かしてしまうような透きとおった瞳を持つ彼の名は……

怪盗1412号

通称 怪盗キッド

予告状を送り付け、数々の不可能犯罪を華麗にこなす、今時レトロ

な宝石専門の天才奇術師は《月下の奇術師》や、《平成のルパン》などの異名をとる。

謎多き人物ではあるが、

ごく少数の人間たちが知り得る彼の秘密は、彼が二代目キッドであるということ。彼はまだ高校生。あまりに若すぎる彼が怪盗を継いだのにはそれなりの理由がある。

先代のキッドこと、彼の父親である黒羽盗一は、8年前、不老不死の秘宝『パンドラ』を狙う黒の組織によって殺された。

そのことを知ってから、父親の仇打ちと死の真相を知るべく、二代目キッドこと、黒羽快斗は、パンドラを求めて一人闇夜を舞っているのである。

…
…
…
…
…

時を遡ること半年…

白いステージ衣装を微かに黒ずませ、一人の青年が、燃えさかる炎とふきあげる黒煙を見ていた。

組織は壊滅した…。

そう。パンドラを狙う我が宿敵はいなくなった。

黒の組織は、ほんの小さな綻^{ほころ}びから壊滅の道を歩んだ。

あの小学生探偵や、赤い髪の少女、そして多くの捜査官が奮闘する

中もちろん自分も助力した。

さすがに自らも犯罪者という立場上、表立った協力はできなかったけれど、少しでも彼等が有利になるようにさまざまな細工を懲らし、彼等を助けた。

赤い炎を見ながら青年は呟く…

「これからどうすっかなあ…」

まだ…パンドラは見つかっていない…

組織は終わった。だが、それは快斗がパンドラを見つけるより先のことだった。

「組織の残党がパンドラを狙わない確証はどこにもない……」

青年はまた呟く。

そして決心する。

パンドラを見つけるまで

パンドラを自らの手で壊すまで

怪盗を続けていくことを…

…
…
…
…
…
…

「朝……か……」

高いビルの屋上で白き罪人が呟く。

空がつつすらと白みをおびてきていた。
もうすぐ日の出の時間だ。

どうやら半年前のことを思い出している間に、かなりの時間がたっていたらしい。

「早く帰らねえと、青子が家に来ちまう…！」

今日は日曜日。

渡したいものがあるらしく、青子が家に来る予定になっているのだ。

そう言つてクスリと笑うのは、クールな怪盗の姿ではなく、歳相応のただの高校生、快斗の姿だった。

「快斗おはよー！！」

バンッ という扉の開く音と同時に飛び込んできた幼なじみの声。

「ノ、ノックくらい…しろよ！アホ子！！」

自室から繋がっている隠し部屋にキッドの衣装を置いてきたばかりだった快斗は、焦っていつものポーカーフェイスが崩れかかってしまった。

「なによぉ！別にいつものことじゃない…。それより、渡したいものがあるの！」

そう言ってニコニコしながら自分のかばんを漁っている青子は、快斗の『アホ子』という言葉聞き漏らしたらしい。

それほどまでに渡したいモノなのか…？
いつもだったら言い返してくるのに…

快斗がそんなことを思いながら黙って青子を見ていると、

「あつた…！ハイ！これ快斗にあげる。」

青子が差し出したのは手の平に乗るくらいの小さな紙の袋。

「何だよコレ…？」紙の袋を受け取って中を覗くと、出てきたのは鈴のついた小さな青い

「お守り…？」

「そう！大学に合格できるように。青子とおそろいなんだよ！」

ニコツと笑って、自分のかばんについているピンクのお守りを見せる。

二人は高校三年生。来月にはセンター試験をひかえた受験生なのである。

二人の志望校は同じ。

日本屈指の難関校 東才大学である。

快斗は法学部、青子は文学部。目指す学部は違つが、お互いに自然と同じ大学を志望していた。

「これがあれば絶対に合格なんだから！頑張ろつね快斗！」

そう言つて青子は階段をパタパタと降りていく。

彼女が玄関のドアをパタンと閉める音を聞いて、フツと笑みをこぼす。

「帰るの早えよ…お礼言いそびれたじゃねーか…」

残された部屋の中で、快斗は嬉しそうにお守りを眺めながら呟いた。

闇に溶けた白き罪（後書き）

作者は初投稿です。至らない点は多々あると思いますが、大目に見てやってくださいませ…

闇夜の瞑想

米花町にある大きな家。

その広い一室で、一人の青年がただ黙々と机に向かっていた。

三月の冷たい風が窓ガラスをガタガタと鳴らす。

窓から見える月は空高くから彼を見下ろし、今が真夜中であることを告げているようだった。

そんな月を眺めてから、

「ちょっと休憩…」

青年はスツ　と立ち上がると、机の上の参考書なんかをそのままにしてキッチンに向かう。

数分後、煎れたてのコーヒーを手に、青年はソファに座った。

眠くてボーッとする体にコーヒーを流し込みながら、青年は目の前のテレビをつけた。

テレビに映ったのは興奮したアナウンサーの姿と周りの雑踏の音。どうやら中継らしい…。

何か大きな事件が起こっているのだろうか…。

高校生探偵として数々の難事件を解決してきた彼 工藤新一は、食い入るようにテレビの画面を見つめた。

アナウンサーの話を聞こうと耳を傾けた瞬間、パッと画面が切り替わった。

現れたのは…

「怪盗キッド」

ビルの窓から、大きな白い翼を広げて、あのキザな怪盗は画面から消えていく。

彼の姿を見たせいかな……

徐々に半年前のことが思い出されていく。

………

黒の組織の壊滅……

FBIまでもが目をつけていた組織の本拠地は今…

目の前で赤々とした炎に包まれている。

ほんの数時間前、命懸けで集めてきた組織の情報を駆使して、あらゆる状況に備えた作戦をたててから敵地に乗り込んだ。

乗り込んだ…といっても、子供が建物に入することを許してもらえなかった。わけもなく、俺と灰原は誰にも見つからないよう勝手に侵入したのだが……

俺と灰原は解毒剤のデータを探すため、研究室を目指した。

途中いくどか出くわした敵も、なんとか退けながら進んでいた時、灰原が俺の服のすそをひっぱった。

「工藤君…アレ……」

「えっ？……………！！」

灰原が指差したのは、前方で倒れている二人の人間。おそらく組織の人間だろう。

「眠っているだけのようね……」 「眠ってるって……一体誰がこんなことするんだ！？FBIはまだここまで来てないだろうし……」

いくら眠いといっても、二人同時に床に転がって寝るなんて考えにくい。

眠らされたと考えるのが妥当だ。

「……工藤君。先を急ぎましょう」

「あ……！待てよ！」

もう走り出している灰原の後を慌てて追いかける。

それから研究室にたどり着くまで誰にも出会わなかった。床で寝ている奴はたくさんいたが……

「ここよ……」

一つの部屋の前で灰原が苦々しげに言った。
いろんな意味で懐かしかったのだろう。

そして灰原がデータをコピーしている間、見張りでもしていようとドアに向かった俺は、あるモノが床に落ちているのを見つけたんだ……。

…
…
…
…
…

「あの時床に落ちていたのは、白い鳥の羽……おまえ、あの場所にいたんだろ？」

ソファに座った新一は、不敵な笑みを浮かべた白い怪盗を映しているテレビに向かって問いかける。もちろんテレビからの返事を期待して問いかけた訳ではない。ただの独り言だ。

俺は、あの場にキッドがいたことを確信している。羽のこともあるが、なにより、奴の気配を感じたからだ。
しかし分からないのは、なぜキッドが現れたのかということ…。俺達を助けに来た…としても…理由がない。

「一体 どうして…」

その時、部屋の隅にある時計の音が三時を告げた。

休憩しすぎたかな…

「勉強するか…」

新一は立ち上がり、机に向かった。

次の日…

ピンポン

玄関のチャイムが来客を知らせる。
その音で、新一は浅い眠りから覚めた。

「やっちゃまった……」

机で寝てしまったらしい……

ため息をつく新一。すると、

「新一！！いないのー？」

玄関から蘭の声がする。

そういえば、今日は一緒に図書館に勉強しに行く約束をしていたんだっただか……

玄関を開けると、教科書の詰まったカバンを持った蘭の姿があった。

「新一……寝てたんでしょ？」

あっ、バレてるし……

何も言わない俺に、蘭は続ける。

「今日の約束の事なんか忘れて、徹夜で勉強しようとしたけど机で寝ちゃった…ってところかしら？」

「え……？」

何で分かるんだよ？

びっくりして何も言えない俺に、蘭は…

「もう！図星なの？早く準備して図書館行こーよ！」

重そうなカバンを振り回して言う。

蘭に押されて家の中に戻ると、俺は急いで準備をした。
これ以上、蘭を待たせると危険だと感じたから…

図書館までの道で、蘭に聞いたところ、
あの時、俺の顔には服のシワの跡がくつきりと残っていたらしい…
それに加えて、玄関のチャイムになかなか反応しなかったこと、寝
癖がついていなかったことなんかから判断したらしい。
それにしても……

「単なる寝坊だとは考えなかったのか？俺が約束忘れてたんだろう
…なんて決めつけやがって」

実際忘れてたけど……

「勘よ！私の勘はよく当たるんだから！」

勘…ですか…

「もう！うたた寝してて合格できるほど甘くないんだからね、東才
大学は」

蘭が俺の顔を覗き込みながら言う。

「分かってるよ、そんなこと！」

東才大学：俺たち二人が目指しているこの大学は、日本屈指の難関校だ。

江戸川コナンとして生活していた間、高校に行っていなかったことは結構辛い。

けど、蘭は文学部、俺は法学部。目指す学部は違っても、三カ月後、二人で東才大学の門をくぐれるように…今は頑張るしかない！

「早く行こーぜ、蘭！」

そう言って蘭の手をひっぱった新一は、もう目の前にある図書館に向かって走り出した。

闇夜の瞑想（後書き）

次回からは、大学生になってからの物語になります。もっと明るい感じにしたいと思ってるので、会話とか多くなるかも…。読んで下さってありがとうございます！！

光が交わるトキ

ここは東才大学の正門。

歩道に沿って植えられている桜の木はお世辞にも満開とはいい難く、ちらほらと花をつけている程度。だが、それでも風によって運ばれる甘い香は確かに春の訪れを告げていた。

「わあ！！なんだかドキドキしちゃうね、快斗！」

隣ではしゃいでいる幼なじみは、グイグイと俺の服をひっぱりながら言う。

「おい青子、あんまり引つ張んな…」

「あ！見て見て快斗！！あんな所に池があるー！見学に来た時は気付かなかったよね？」

（…って、全然聞いてねえよコイツ…）

ハア…

ささやかな抗議を無視された俺は、軽くため息をついてから諦めて再び歩き出す。

それにしても広い学校だよなあ…

やはり高校とは違う。

出入口には警備員室なんてものがあつたし、敷地内と外を隔離している黒い長槍のような柵。アレを飛び越えることは可能だろうか…なんて、無意識のうちに周りをキョキョ口詮索している自分に気が付き、心の中で苦笑した。

（こりゃあ職業病かもな…）

そして、ある事に気付く。

「そっぴやおまえ、いつまで俺に着いて来る気なんだ？文学部って棟だろ？C棟ならさっき通り過ぎ…」

「あーッッ！！なんで言ってくれなかったのよお。快斗のバカ！」

（ハハッ 最後まで言わせろって…）

「それじゃ、私行くから！またあとでね」

「おう」

軽く返事をした後、元来た道を走って引き返して行く青子に背を向けて、歩きだした。いや、歩き出そうとした…と言うのが正解だろうか。

「よお、工藤！」

すぐに後ろから誰かに肩を叩かれた……

「新一、今日ってキッドの予告日でしょ？新一も行くの？」

大学の正門を入った辺りで、隣を歩いていた蘭が聞いてきた。

「ああ。一応、目暮警部からキッド専門の課に話を通しといてもらうように頼んであるんだ。受験も終わったし…。」
(奴に聞きたいこともあるしな…)

心の中だけで、そう付け加える。

「そつかあ…。新一、久しぶりの現場だからって無理しないでね」
心配そうな蘭の顔が少し近づいてきて、思わずドキッとしてしまった俺は、

「分あってるよ！ガキじゃあるめえし…」

…なんて、目をそらして言うのが精一杯だった。

「ホントに無理だけはしないでね…？それじゃ、私こっちだから！また帰りにね！！」

淋しそうな笑顔を残して、角を曲がっていく蘭を見ながら俺は思った。

工藤新一の姿に戻って工藤邸で元のように暮らし始めてから、俺はまだ一度も現場に行っていない。遅れをとった受験勉強に専念するためだ。

そして受験を終えた俺は今日からまた事件に関わることになる。蘭の不安はどれほどのものだろう…。そう考えると、罪悪感にしめつけられる。

そんな時、少し前の方に俺は、見慣れた後ろ姿を発見した。

そいつは少し小走りして誰かに近寄ると、肩を叩いて話し掛けている。

「アイツ…誰に話し掛けてんだ…？」

「よお、工藤！」

誰かに肩を叩かれ、俺は振り返る。

「久しぶりやなあ！半年ぶりくらいか。元気しottaか？」

振り返った先の顔を見て、俺は一瞬思考が停止した。いつものポーカーフェイスが脆くも崩れ去りそうになるのを必死にこらえる。

（コイツ確か西の高校生探偵の…名前は、えっと…服部！服部平次だ！！なんでここに？もしかして、もしかしなくとも同じ学校？コイツと！？オイオイオイ…勘弁してくれよ…面倒なことはゴメンだぜ？）

そんな心の叫びとは裏腹にすごく嫌な予感がするのは気のせいか…何か『さらに良くないモノ』が近づいてきている気がしてならない

「どないしたんや？工藤、ボーツとして」

服部が妙なものを見るような視線を向けてくる。

「いや…俺は工藤じゃなくて…」

「何してんだ、服部？」

ふいに横から割り込んできた声。振り返らずとも、快斗にはその声の持ち主が分かる。自分とよく似た声。

やっぱり…

振り返ると『さらに良くないモノ』もとい、工藤新一が二人のすぐ後ろに立っていた。

「……………」

三人の間に流れた微妙な沈黙。それを破ったのは、服部だった。

「工藤…、おまえ双子やったんか？」

「んな訳ねーだろ。分かりきってる事聞くなよ」

服部は、だよなあ…とでもいうような顔をする。

そして二人の目は同時に快斗に向けられた。

（この状況どうすっかなあ。いつそ逃げてみようか？いやいや、いくらなんでも怪しすぎるか…とりあえず何か話さないとまずいよなでも…）

探偵二人に囲まれているというのは、さすがに気分のいいものではない。

どうするべきか…

そんな時、ちょうどいいタイミングで校舎から鐘の音が響く。

辺りを見渡せば、周りを歩いていた奴らははるか前方を走っていた。

チャンス…！

「遅刻しますよ？お二人とも」

それだけ言っで、俺は校舎に向かって走り出した。

口調がやけに丁寧になってしまったのは、今まで『キッドとして』しか彼らに接触したことがなかったからだろう。咄嗟に口を突いた言葉だった。

今逃げ切れたとしても必ず近いうちに『黒羽快斗』として、彼らと接触しなければならぬことは十分すぎるほど理解している。

しかし、今この場で、彼らと話すのは自殺行為になりかねないということも快斗には分かっていた。

先ほど、つい口から出てしまった『キッド』の口調。相手が彼らだからこそ、いつ自分の裏の姿が、表に出てくるか分からない…。

まずは頭の整理をしなければ…！

「妙なことになっちまったな…」

快斗は走りながら呟いた。

校舎の鐘が鳴った。その瞬間、俺によく似た声で

「遅刻しますよ？お二人とも」

…と聞こえた。

どこかで感じたことのあるような気配。一体これは…

このモヤモヤした気持ちの正体を思い出そうとした時、服部の声によって急に現実に取り戻された。

「工藤！本間に遅刻すんで！！入学初日から遅刻なんてシャレにならへんわ」

もうすでに走り出している服部の後を、俺は慌てて追いかけた。

ほのかな桜の香の中。

怪盗と名探偵という対極に位置する光は、その数奇な運命に翻弄されながらもこういった新たなカタチで出会うことになった…。

光が交わるトキ（後書き）

大学の入学式当日の話に入りました！！分かっていただけたとは思いますが、入学式当日と、怪盗キッドの予告日がかぶっています。なので、この日に関する話は長くなってしまうかも…。それでは、読んで下さりありがとうございます。

戦闘開始…！？

「それじゃあ全員速やかに講堂に向かうように！」

学部ごとに入学式の簡単な説明を受けた後、生徒たちは入学式の行われる講堂に移動するよう言われ、一斉に廊下に出た。当然のごとく廊下は人で溢れ、ろくに身動きもとれない状況になる。

人ごみに流されながら、快斗は考えていた。

一日の約半分を探偵と同じ場所で過ごすとなれば、そのリスクは計り知れない。それに、あの探偵たちの実力は十分に分かっている。常に気を張っていれば逃げ切る自信はあるが、やはりできるだけ彼らと距離を置くのが一番の得策だろうか…

そんな事を考えていた時、前の方に並んで歩く探偵たちの姿を見つけた。なにか真剣な様子で話し合っているようである。

何話してんだ？

人ごみをすりぬけて、気付かれないように彼らの真後ろで聞き耳を立てる。

「しかしキッドっちゅーのもよう分からん奴やなあ。せつかく盗んだもんもすぐ返してまうし、そやかて愉快犯とも思えんし…」

どうやら自分の事が話題にされているらしい…

「どんな目的があるにしても、奴はただのコソ泥だよ。奴が俺に捕まるっていう事実はかわんねえさ！」

自信に溢れた言葉が紡がれる。

ほおー！言ってくれんじゃねえか名探偵…

探偵のその言葉は、快斗の表情に不敵な笑みを浮かばせた。

そこまで言われたら逃げ回っている訳にはいかねえな。

身に纏っていた空気が一瞬にして怪盗のモノに変わる。

おもしれえじゃねえか。確保不能の大怪盗と、相手として不足なしの名探偵！

…絶対逃げ切つてやるよ！

さあ、ショーの始まりだ！

その挑戦…
受けて立つぜ？名探偵。

その時、

バツ と新一が後ろを振り返った。

（や、やべっ！）

快斗は慌てて気配を消し、素早く横にずれた。

新一は険しい表情で後ろをキョロキョロ見渡している。

「どないしたん？」

服部の問い掛けに、新一はようやく視線を前に戻し、言った。

「いや、今一瞬だけ奴の気配がした気がして……」

「キッドがこないなトコにおるわけあらへんやろ。工藤、おまえ今日が久々の現場やからって気合い入りすぎてんのとちゃうか？」

ニヤーっと笑う服部を、不満げにジトツとした目で見上げると

「そんなんじゃねえよ」

と、隣の友人をどついて、スタスタと先に歩いていく。

（あつぶねえ……まさかいきなり振り返るとは思わなかったぜ。も

つと気をつけねえとな)

彼らの後ろでホッと安堵の息をついた快斗は、少し距離を置いて、また歩き始めた。

入学式は何事もなく終わり、日が傾き始めた。
オレンジ色に染められていた街が、まもなく深い藍色にうつめつくされていく。

午後7時を廻った頃、
同時に、二つの家の玄関が開き、青年が家から出てきた。とても似た顔つきをした二人の青年は、その場でゆっくりと一呼吸した後、自信に満ち溢れた表情で歩を進める。

「今夜の獲物は佐野ビル19階、宝石展の目玉 オーシャンドロップ。ヘリが2機、屋内の警備は180人つてとこかな…予告時間の11時まで、あと2時間もあるつてのに気合い入ってんなあ」

佐野ビルから少し離れたビルの屋上で、不敵に笑う白い人影の手にはオペラグラスが握られている。

「それに今夜は私の好敵手がお越しのようだし…、気は抜けませんね」

口調を変え、そう言う彼は、心から楽しんでいるようだった。

久しぶりに、頭の切れる奴との対決だからな！白馬のヤローはイギリスに帰っちまったし…

「しかし、風強いなあ…。これ以上強くなんなきゃいいけど…」

「ホールに警官を入出させる時は、氏名、年齢を確認してください」

ホールの出入口の警備をする警官に指示を出しているのは、大学生になったばかりの探偵、工藤新一。

警官たちは以前、時計台の事件でキッドを追いつめた過去のある彼の指示を素直に受けていく。

「僕は監視カメラの映像が確認できる警備室で待機しています。ホールでは中森警部の指示に従ってください」

ひととおり指示を終えた新一はホールをあとにし、警備室に戻るため廊下を歩き始めた。

24階建てのビルの中の造りは完全に把握している。この建物を見た目より複雑な構造をしており、警備が難しいのが難点だ。特に階段は1フロアに5カ所もあり、キッドの逃走経路が予想しにくい。だが、監視カメラの数が多いというメリットもある。だからこそ、指示の出しやすい警備室に待機することにしたのだ。

廊下でふと足を止め、窓から外を見下ろす。夜の闇と言うには、少し明るすぎる景色。さまざまなライトが交差し、何重にも折り重なるのを見ていた時、新一は、先程から聞こえてくる音に気付いた。

「風が強くなってきたみたいだな…」

高層ビルの分厚いガラスを揺らすほどではないが、それでも音から判断する限り、かなりの強風が吹いていることは間違いないだろう。

「風か…」

新一の瞳に光が宿り、口もとには薄く笑みが浮かぶ。

今日こそ捕まえてやるよ。
コソ泥さん…？

戦闘開始…！？（後書き）

更新が遅くなっていました…（汗 私の駄文を読んでくださった方、アドバイスなどいただければ嬉しいです！！　とうとう戦闘開始！っていう展開になった訳なんです、よく考えてみたら快斗の方が不利ですかね？2対1だし…　最後になりましたが、後書きまで読んで下さり、ありがとうございました！

攻防の果て

「予告1時間前だ！全員気を引き締めていけよ！もう奴は変装してこの場にいるかもしれないんだからな」

現場を取り仕切る中森警部が大声を出す。ホール内にいるのは、中森警部と警官が30名ほど、それに宝石展の主催者であり宝石の持ち主でもある上品な老人。その全員に緊張が走る。

「念のため、今から全員の顔を引つ張りたい所だが…」

と言いかけ全員の顔が引きつった時、ホールに新一が入ってきた。

「中森警部！警官の配置の変更をお願いしたいのですが」

そう言いながら新一は中森警部に駆け寄り、ビル内の見取り図を広げる。

「14階より下に配置されている警官を………つついいいひゃいです、なかもりけーぶー!!」

新一の言葉が途中で止まったのは、中森警部に顔を引っ張られたからである。

頬が赤くなり、ジンジンするまで引っ張られた後、

「いやあ、すまんなあ工藤君。警官の配置変更なんて言うからキツドの変装じゃないかと思ってなあ！ははははは！」

そんな言葉を投げかけられた…。新一は、目の前で意地悪そうにニヤニヤ笑う人物にうつすら涙で滲んだ恨みの視線を送りながら、絶対に私怨だと感じた。

こんな青二才に現場の指揮をとられることが気にいらないのだろうということは分かっている。新一だって中森警部の、刑事としての腕は悪くないと思っているのだが、いかんせん相手が相手だ。このままでは終わりは見えない…。

今後、中森警部には必要以上に近寄らないようにしよう。会う度に顔を引っ張られたのでは堪らない…
そう決心し、さりげなく彼から少し離れるとまた説明を始めた。

「14階より下の階に配置されている警官をもっと増やしてほしいんです。このホールがある19階から16階と、14階から下に警官を多く配置してください」

「そんなことして、どうなるんだ？19階から上は警備しないつもりか！？」

「あ、それと15階から14階に下りる階段の途中に5人ずつ！」

警部の質問には答えず、新一は思い出したように付け加える。

「階段の途中だあ！？いったい何のために……？」

新一の指示した配置に疑問を抱いた中森警部に向かって、大丈夫ですよ と笑いかける。

「僕にまかせてください。必ず奴を捕まえてみせますから！」

さあ時間だ…

そろそろ行きますか！

予告3分前、警備の者達の緊張が最高潮に達していた時、ホールに一人の青年がゆっくりと入ってくる。ホール内の者達は彼の姿を見つけると驚きをあらわにした。

ホールに入ってきたのは…

「工藤探偵！どうしたんです？警備室で待機のハズでは…」

そう尋ねてきた警官の方に向き直り、長い人差し指を口元まであげて、『黙って』と、ポーズで示す。薄い笑みと共に…。

先程までの彼とは少し違う雰囲気漂っている。

中森警部が不審に思い彼に近づこうとした瞬間、どこからか鳥の羽音がした。

慌てて音源を探そうとした者の視線の先には一羽の白い鳩。そして、

その鳩はあろうことが、たった今ホールに入ってきた工藤新一の肩に降り立った。

「It's show time!!」

よく通る声は、白鳩を肩に乗せた青年から…

そしてその瞬間、ビル内の照明がすべて落とされた。

「キッドだーっ!! 宝石を守れえっ!」

暗闇の中、中森警部の叫び声が聞こえ、間髪入れずにバタバタと警官が宝石の入ったガラスケースに走り寄る。

そんなに大勢寄って来たら逆効果だってことに、どうして気付かないかなあ？

不謹慎にもそんなことを考えながら、暗闇でも見える目を使ってさっさと宝石を盗んだキッド。もつとも、今は工藤新一の姿だが…。そして、警官の中でもみくちゃんになっている中森警部を見つけると、

「では、またお会いしましょう中森警部」

彼にだけ聞こえる大きさを囁いて、ホールから脱出した。まだ暗いままの廊下を一番近い階段に向かって走る。

今夜は屋上には向かわず、正面玄関を突破する算段だった。逃走手段としてもはや定番化してしまっているハンググライダーを敢えて使わず、警備の穴を突くためだ。もう一つ理由はあるのだが…

後は、この宝石がパンドラかどうか確かめるだけ！

ただ、少し簡単に事が進みすぎだよな…

あの名探偵が素直に引き下がるなんて考えられねえし！絶対になにか企んでやがるな…

そんな彼の予感当たってしまう訳で…

動きの良すぎる警官たちから逃げているうちに、下に降りるところかどんだん上に追いやられて結局、屋上まで来てしまった。

ハア…

微かにこぼした溜息は、唸りをあげて吹き荒む風音の中に消えてい

く。もう探偵の変装は解いて、いつもの白いステージ衣装に戻っている。

ハンググライダーを使わないもう一つの理由…

それはこの強風だ。こんなんじゃ命がいくつあっても足りやしない。

それでもとりあえず宝石を月にかざしてみる。

ハア…

本日二度目の溜息が風に飲み込まれていく。

その時、屋上の扉がギイイと開いた。

扉から出てきたのは、勝ち誇ったような笑みを浮かべる名探偵…

俺はゆっくりと屋上に通じる扉を開いた。

そして、そこに立っていた人影を見て思わず笑みをこぼしてしまう。
独特の冷涼な気配を漂わせて佇む我が好敵手、怪盗キッド…

「なるほどね。俺はここまで誘導されてたって訳か」

そう言う怪盗の口調からは少しの焦りも感じられない。むしろ楽しんでるようにも見える。だが、今の状況においては自分が優勢であることには違いない。

「ああ、今日は風が強いんでね。自慢の羽は使えないんだろ？」

「そこまでお見通しか、さすがだな名探偵は」

猶も楽しそうに奴は笑いながら答える。

何故笑っていられるんだ？まだ何か勝算があるとでもいうのだろうか…

……まあいい。とりあえず奴に聞きたいことがあるんだ。

「どうして組織壊滅に手を貸した？」

上着のポケットから、あの時拾った白い羽を出しヒラヒラと振りながら問い掛けた。

突然の質問に驚いたのか、モノクルに隠れた瞳が一瞬揺らいた気がした。

「別に手を貸した訳じゃないさ。俺は俺の目的のために動いただけ……」

予想外の返答に何も答えず、言葉の真意を考え初めてしまった俺に怪盗は付け加える。

「お前は目的を果たしたかもしれないが、俺は果たしていない。まだ終わってないんでね。今捕まる訳にはいかねえんだよ」

マズイ！本能的にそう思った。でも、もう遅い。

奴の白い手袋にはいつのまにかボールのようなモノが握られていて…
その手を上に振り上げると、勢いよくボールを地面に叩きつけた。
途端に吹き出した煙幕のような煙は、風下にいた新一に物凄いスピ
ードで迫ってくる。

「じゃあな名探偵！」

すぐ横を通り過ぎていく奴を追おうとして、体の異変に気付いた。

くそ！しびれ薬か！

思うように動かない腕を必死に動かして、何とか無線を掴む。

頃合いを見計らって、

「屋内にいる警官の皆さん、全員15階に集まって下さい！」

そう指示すると新一はガクンとその場にうなだれた。

攻防の果て（後書き）

読んで下さりありがとうございます！この話の中では初めての対決でした。今回は服部君は現場に登場しなかったんですが次回からは出ると思いますので…

夜が明けたら（前書き）

関西弁おかしかったらすみません…（、、）

夜が明けたら

…眠い。

欠伸が止まんねえ…

「ねえ、快斗ってば聞いてる!？」

予告日の翌朝、学校に向かう途中で青子がそう聞いてきた。青子の方を向いた瞬間、飛び込んできた眩しい朝日に思わず目を閉じる。

「…悪い何の話だっけ？」

「怪盗キッドよ!また逃げられちゃったの。キッドのせいで、お父さん帰って来たの夜中の3時なんだから!」

ああ、その話か。

それなら俺だっけ昨日はヒドイ目に…なんて言える訳ない。

チラリと青子を横目で見て、そう言いたい気持ちをグッとこらえる。

「お前の親父なんかキッドが捕まるワケねえよ。さっさと諦めちゃえばいいのにさ」

ふあああ…

また欠伸が…

隣で青子がまだ何か言ってるけど、眠すぎてそれどころじゃなーや。

昨日あの名探偵から逃れた後、俺は急いで階段を駆け降りた。探偵君が動けないとなれば、もう楽勝！そう思ってた。…でも甘かったんだよな。15階くらいまで降りた時、上からも下からも警官の足音が近づいてきて…

それからもう…

慌てて逃げ込んだ15階で明け方までの鬼ごっこ。
やつのことで逃げ切って家に帰ったのは2時も半分を廻った頃だった。それから宝石を返す手筈を整えて、結局1時間も寝られなかった…

やってらんねえよ…

「それで、薬の効き目が消えるまでずっと一人で屋上におったんか？」

朝、学校に着いてから服部に昨日の事をすべて話した。静かに俺の話聞いていた服部が発した第一声がコレ。

「…ああ」

キッドに逃げられてからの事を思い出し、自然と口調が不機嫌になっってしまう。

「そりゃ災難やったなあ！一人で、3時間も！」

「服部、顔が笑ってるぜ？」

言葉をどう取り繕っても、ニヤけた顔が彼の本心を語っている。

ニヤロオ…

人ごとだと思いやがって！

「ははっ！勘忍やで、工藤？それより、そろそろ講義始まるで。」

そう言っ、服部は俺の隣で教科書を出し始めた。

席は自由なので、今日俺たちは真ん中より少し前の方に座っている。なんとなく後ろを振り返ってみると、皆整然と席に着き始業を待っているのが見えた。なんというか、真面目オーラがでてる感じ…

まもなく始業のチャイムが鳴り、講義が始まった。

紙上を滑るシャープンの音、ページをめくる音、抑揚の少ない教授の声…

始業から数分後、新一は迫り来る睡魔と必死に闘っていた。今居る空間から発せられるすべての音が眠気を誘う。

眠イ…

昨日ほとんど寝てねえからなあ。ちよつとだけ…5分だけ寝よ…

欠伸を噛み殺し、机に頬杖をつくと新一は意識を手放した。

なんや、工藤寝てしもたんか？大学で初めての授業なのに、始業数分で寝るってどおいうことやねん！

真面目に講義を聞いていた平次は、隣で静かに寝息を立てている新一を見て溜息をついた。

こんな奴他におらんで？

そう思つてチラリと後ろを覗いてみた。

… あ！おつた！！

真剣な表情が並ぶ中に紛れて、1番後ろの席に、机に突つ伏して寝ている姿が目に入った。

顔は見えへんけど、工藤より堂々と寝とる…

アカン！こいつら見とつたら俺まで眠くなつてきてしもつた。

平次は慌てて前に向き直ると、また元のようにノートを写し始めた。

鳴り響くチャイムが80分間の講義の終了を告げ、学生たちが部屋

からどんどん出ていく。

「おい工藤、帰るで！はよ起きんかい！！」

人数がだいぶ減った室内で平次は、結局最後まで起きなかった新一を揺さぶっていた。だが、新一は一向に起きる気配がない。

「ったく、いつまで寝とる気や！」

…そや、ええ事思いついた

ニヤリと笑った青年は新一を揺さぶるのをやめ、大きく息を吸い込む。

そして次の瞬間、

「キッドやー！怪盗キッドがおったでー！！」

ほとんど人がいなくなっていた室内に声が響いた。

途端にガタツと椅子の音をたてて立ち上がった新一……と、もう一人。

あらぬ方向から聞こえた椅子の音に平次が後ろを振り向くと、そこにはもう一人の居眠り青年こと、黒羽快斗が何とも言えない表情で立っていた。

なんや、後ろで堂々と寝とったんはアイツやったんか、昨日の朝会うた工藤のそっくりさん…

「大声出してスマンかったなア！コイツがいつまでたっても起きひんから…」

とりあえず謝つとこ！

驚かせてしもたみたいやしな…

でもまあ調度ええわ。なんか知らんけど、アイツと話してみたかったんや。

平次は、ニコニコと愛想を振り撒きながら快斗に近づいていった。

「キッドやー！怪盗キッドがおったでー！！」

突然こんなセリフが耳に響いた。今日の明け方まで嫌という程聞いてきた言葉…

寝ぼけてた俺は思わず立ち上がってしまった。

逃げなきゃ…って、アレ？ここ学校？

ビルの廊下にいるつもりだったので、目の前に広がった学校の風景に戸惑いその場に立ち尽くす。

その時間こえてきた関西弁での謝罪の言葉。

西の名探偵、服部平次。またコイツかよ…しかも近づいてきてるし！それに、俺が驚いたのは『大声』じゃなくて、その『内容』なんだけど…

「よお！もう授業終わつとんで？兄ちゃん名前は？」

名前か…。聞かれたら答えない訳にはいかねえよな。

「俺は…黒羽快斗。君は服部平次君だろ？」

一瞬の躊躇はあったが普通に名乗り、ついでに付け足した言葉に、案の定彼は驚いた様子で

「なんで俺の名前…」

「知ってるさ。服部君と工藤君、君達有名だから」

当たり障りのないように笑顔で答える。

「そーなんか？まあ、どうでもええけど“服部君”はやめへんか？呼び捨てでええで？俺も“黒羽”って呼ばせてもらっし」

「ああ、じゃあそつさせてもらっしよ」

まさかこんなにフレンドリーに話す日が来るとはな…

そんな本音は置いて、また笑顔で返す。

服部と会話をしながらも、視界の隅でもう一人の名探偵の接近を確認する。かなり眠そうな様子…

「工藤、お前のそっくりさんやで!!」

そっくりさんって…

「ああ昨日の…!」

もう、すぐ側まで歩いて来ていた彼とも自己紹介をする。できるだけ早くこの場から去りたいという願いが叶うことはなく、二人からの質問の波はとどまる事を知らずに押し寄せてくる…

揚げ句の果てに、そのまま一緒に外まで行くことにまであってしまっていた。

正門に向かう途中に、工藤が際どい質問をしてきた。

「なあ、黒羽? お前、俺と前に会ったことねえか? 昨日から思ってたんだけどよ…」

ええ、ありますとも！

なんて言えねえから、適当にごまかす。

「ないんじゃないか？俺は知らねえよ？」

「じゃあさ、眼鏡掛けた小学生の坊主に会ったことは？」

それ聞いていいのかよ…？心の中だけでツツコミを入れる。隣の服部もちよつと焦ってるみたいだし。

でも、ひよつとするとコレはチャンス？俺ばかりヒヤヒヤしてて悔しいから、ささやかな仕返しを試みる事にした。

「さあ？そんな子も知らないけど、その子と工藤はどういう関係なの？」

途端に工藤は言葉に詰まった。目線だけで服部の様子を確認するとどうやら呆れているようだ。そりゃそうだろう。いくら初対面相手だからって、口が滑りすぎだ。

数瞬の沈黙の後、工藤が口を開く。

「親戚の子…かな？」

…疑問形ですが。

まあいつか。可哀相に思えてきたので話題を変える。どうせなら情

報収拾だ！

それから正門に着くまでの数分間、笑顔のポーカーフェイスの下で
快斗の頭脳はフル回転することになる…

夜が明けたら（後書き）

読んで下さりありがとうございます。次回から和葉ちゃん登場すると思います！

もう一つの出会い

今日から授業かあ…！

少し弾んだ足どりで歩いていた少女は、立ち止まって目の前に建つ校舎を眺めた。

東才大学C棟、文学部の棟である。最近建て直したばかりだという校舎は陽の光をよく反射し、他のどの建物よりも白く輝いて見えた。もちろんそれには、これからの学園生活に対する自分の希望と偏見が含まれていることくらい分かっているのだが…。

「蘭ちゃん！！」

不意に後ろから呼ばれて振り返ると、ポニーテールの少女が自分に手を振りながら走って来るのが見えた。

「和葉ちゃん！おはよう」

隣に来た友人に笑顔で返す。

「おはよう蘭ちゃん！今日から授業やなあ。なんか緊張するわあ」

「そうよね。あ、そうそう今日って午前中に授業終わるんだよね？学校終わったらどこか遊びに行かない？学校の帰り道においしいケ

「キ屋さんがあるの！」

実家が大阪にある和葉は大学進学と同時に上京し、今は蘭の家の近くで一人暮らしをしている。

「うん、行く行く！まだ引越してきたばかりやから、あんまりお店とか知らんねん」

「じゃあ決まりね！他にもお店とか見てまわろっか？東京見学も兼ねて」

「ほんま？助かるわあ！おおきに蘭ちゃん！」

校舎に入って、昨日と同じ教室のドアを開く。

「少し早く来過ぎたみたいやね？」

始業までまだ20分もあるせいか、室内には数える程しか人がいなかった。

蘭ちゃんもおるし、20分なんてすぐ経つやろ…

そんな和葉の予想通り、午後の計画を立ててるうちに空席は目立たなくなっていた。

蘭との話も一段落つき、教科書を出そうとカバンに手をかけた時、

「あの一、隣座ってもいいですか？」

不意に掛けられた言葉に、どうぞ、と言ってから顔を上げた和葉は驚きで目を見開いた。

「ありがとう！」

そう言っ左隣に座った少女の顔を、穴があきそうくらい凝視する。

蘭：ちゃん？

いやいや、蘭ちゃんはあたしの右隣におるねん！

そつと右隣を確認すると、そこには携帯をマナーモードにしている蘭が確かにいる。

あ、あたしもマナーモードにせな…
って違うねん！

「な、なあ蘭ちゃん？蘭ちゃんは双子だったりするん？」

小声で蘭ちゃんに聞いてみると、

「どうしたの和葉ちゃん？そんなわけないじゃない」

…笑われてしまった。

「そ、そっやんなあ？」

じゃあ他人の空似？似過ぎや！こんなこともあるんやなあ…
なんか興味湧いてきた！話し掛けてみよ！！

「なあ、名前なんて言うん？あたしは遠山和葉っていうねん！こっちは蘭ちゃん」

勝手に蘭ちゃんのことまで紹介してもうたけど、ええよな…？

和葉の視線に気付いた蘭が、改めて自己紹介をする。

「毛利蘭です。よろ…」

蘭ちゃん、女の子の顔見た途端に言葉を失つとる…

女の子の方もや…

そりゃそっやんなあ？自分と同じ顔の人がいるんやもん！

少しの沈黙が流れた後、

「わ、私、中森青子っていいいます。はじめまして！」

かなり動揺しながらも、そう言ってくれた女の子に、あたしが返事

をする。

「青子ちゃん、はじめまして！仲良くしよな？」

「うん！よろしく和葉ちゃん、蘭ちゃん！」

うわー！笑った顔も蘭ちゃんそっくりや！

もっというろいろ話そうと思った時に始業のチャイム…

残念やわあ…

でも、青子ちゃんとは仲良くやれそうや！

「ねえねえ、蘭ちゃんってもしかして毛利探偵の…」

「え、お父さんの事知ってるの？」

授業が終わって帰りの支度をしながら、しばしの談笑会。

「うん。青子のお父さんは刑事だから、何度か毛利探偵にはお世話になってるみたいで」

「青子ちゃんのお父さん…って、もしかして中森警部？キッド専門の…私何回か会った事あるの！」

なんや、二人とも全くの無関係ってわけでもなかったんやね。

「そういえば昨日ってキッドの予告日やったんやろ？平次は行かんかったみたいやけど、工藤君は…」

支度が終わって3人で廊下に出た時に、ふと思い出して言った。

「新一は行ったと思うよ？逃げられちゃったみたいだけど」

そう言って蘭が苦笑する。

「もしかして、その二人って高校生探偵の？知り合いなの？」

青子ちゃん、めっちゃ驚いてるやん…

「知り合いっちゅーか、腐れ縁みたいなもんや。今は高校生やなくて、東才大学1年生やけどな。たぶんもうすぐ会えるで？正門で待ち合わせしとんねん」

「平次達まだ来とらんみたいやね？」

和葉が辺りを見回して言う。もうどの学部も終わってる筈なのに、と怪訝そうな顔をする。

「快斗もまだ来てないや……」

小さく漏らした青子の独り言に、蘭が反応する。

「青子ちゃんも誰かと待ち合わせしてるの？」

その問い掛けに、うん、と頷いて

「青子の幼なじみなの。マジックが上手でね……あ！来たよ！」

青子が指差した先には並んで歩いてくる3人の姿があった。この後、すでに知っていた快斗を除く5人がまたもや『双子説』をもちだしたのは言うまでもない。

「しかし本間にびっくりや！工藤だけやのうて、姉ちゃんのそっくりさんまでおるなんて…」

服部が蘭と青子を見比べながら呟く。よく見れば微妙に違うのだが、一目見ただけではまず分からないだろう。

俺も初めて見た時はさすがに驚いたけど…

楽しげに話す3人を振り返りながら快斗は思った。

蘭を初めて見たのは、もうだいぶ前のこと。今更驚きも何もない。

もうあんなに仲良くなってやがる。でも、まさか帰り道まで同じとはなあ…

米花町と江古田市は近い。もちろん乗る電車も一緒なわけで…

迂闊だったよな…

内心溜息をついたが、それが表情にできることはない。

「なあ、アイツら寄り道して帰るんだって。俺達もどっか寄ってく

か？」

駅に着いた時、突然の工藤からのお誘い。アイツらって…青子もかよ！いつのまにそんな約束してたんだ？

「あー、俺今日は寄る所あるから！」

…嘘じゃない。用事があるのは本当。今日は寺井ちゃんと、次の『仕事』の計画を立てる予定だった。

「それならしゃーねえか。じゃあまた次の機会にでも」

青子たちが最初に電車を降りて、次は俺、工藤たちはもう少し先の米花町で降りるんだろう。適当に挨拶して二人と別れた後、ドツと疲れが襲って来た。自分で思っていた以上に緊張してたのかもしれない。

あー疲れた…

でも情報も少しは手に入ったし、後は寺井ちゃんにでも相談すつか。

目指すは寺井ちゃんが経営するビリヤード店『ブルーパロット』

もう一つの出会い（後書き）

やっと和葉ちゃん登場させることができました！！女の子はみんな文学部です。関西弁おかしくなってる所があつたらすみません…思いつき関東住まいなモノで（汗）

疑念と思惑

「なあ、アイツの事どう思う？」

午後の柔らかな光が差し込む自宅のリビング。自分が最も落ち着ける場所で、俺は目の前の客人に問い掛けた。

「アイツって…黒羽のことか？」

こちらには目を向けず、出されたコーヒーに手を伸ばしながら答えたのは、服部平次である。

「ああ」

それだけ言つて、相手の言葉を待つ。

何故だか妙に気になった同級生について、信頼できる友の意見が聞きたかった。

どう思つて聞かれてもなあ、と困つたような顔をしながら一言、

「別に普通やろ？」

予想通りの返答。そう、別におかしな所があつた訳じゃない。そんな事は自分もよく分かっているのだが、でも何かがひっかかる。

「俺、やっぱり黒羽と会ったことがある気がするんだよね…」

服部は、気にしすぎや、と笑うけど。唯の勘違いなんだろうか…

「同じ顔やから物珍しいだけや！おかしいとこなんか一つもあらへんかったやろ？…まあ、度胸のある奴やとは思たけどな」

「度胸…？何でだよ？」

付け足された言葉が気になって今日一日を思い返してみたが、俺には思い当たる節がない。

「ああ、お前も寝とったから知らんやろうけど、黒羽の奴も授業中思いっ切り寝とってん！それも、こう机に突っ伏して堂々とな…工藤もやけど、よくあの雰囲気の中寝れるよな…」

服部が両腕を顔の前で組んで突っ伏す真似をしながら呆れたように言った。

だって昨日ほとんど寝てねえし…

悪態をつくのは心の中だけで。どうして寝れなかったのか、その理由をまた話題にしたくなかったからだ。

「唯の思い違い…か…?」

席を立ちながら独り言のように呟いた言葉。会った事があると確信を持って言える訳でもないし、と考えを改め始める。

「そやそや。それに、黒羽ってなかなかおもしろそうな奴やんか。俺は気に入ったで!」

色黒の肌によく映える白い歯を覗かせて、服部が笑いながら答えた。

それには同感だ。今日初めて会ったばかりでまだ何とも言えないが、アイツには人を引き付ける何かがあるような気がする…。

「まあな、俺も嫌いじゃないぜ?」

「それじゃあ次の獲物は来週末から東才美術館で展示される“candy piece”に決まりだな」

落ち着いた雰囲気店内、そのカウンターで快斗が言った。彼の前には数枚の資料が無造作に置かれている。

『ブルーパロット』

時折、老人らしからぬ鋭い眼光を見せる店主が営むビリヤード場である。

普段はそこそこ客足も良く人で賑わっているこの店だが今日は、本日定休日の札が掛けられている。

「そうですね。北欧で有名なダイヤモンド“candy piece”、まさか日本でお目にかかれるとは思っておりませんでした。昔は門外不出の品だったのですよ」

答えたのは店主、寺井^{じい}黄之介。通称『寺井ちゃん』

元は快斗の父、黒羽盗一の付き人であり、今は二代目キッドこと快斗の良き協力者である。

ふうん、と大して興味もない様子で目の前の資料を片付け始める快斗。だがその動きはすぐに止まる。そして、急に固まった自分を不思議そうに見つめる老人に向き直る。

「あ、あのさ寺井ちゃん、落ち着いて聞いてくれよな？」

大事なことを言い忘れていた。ここに来たもう一つの理由…

「実はさ…」

探偵二人と同じ大学に通うことになった、と慎重に言葉を選びながら説明する。慎重に話したのは、これ以上寺井の心労を増やしたくないという快斗なりの配慮だったのだが、内容が内容だったためあまり意味はなかったようだ。

快斗に出すつもりだったジューズを持ったままカウンターの向こう側で立ち尽くす彼は、まさに顔面蒼白という感じだろうか…

「じ、寺井ちゃん…？」

恐る恐る声を掛けてみると、途端にガシツと両肩を掴まれ揺さ振られる。

「そんな危険な所に坊ちゃんまを行かせる訳には参りません！！」

危険な所って…学校なんだけど。行かない訳にはいかねえだろ…

思いつ切り揺さ振られ、クラクラする頭で、ぼんやりと考え導き出した正論。両肩を掴んでいる手をやんわりと外し、今にも泣きだしそうな寺井に笑みを向ける。

「大丈夫だつて！俺が捕まるなんてヘマする訳ねえだろ？怪盗キッドは神出鬼没、確保不能の大怪盗なんだからよ！」

自信たっぷり言ってみせるけど半分本気、半分嘘。

あの探偵達の力は時に予想外。今までの対峙で何度ヒヤツとしたことか…

これからの大学生活に不安がないと言えば嘘になる。

でも先にも言った通り、逃げ切る自信があるのも本当。彼らとの対決を楽しみにしている自分がいるのも事実だ。

寺井は快斗の言葉にも未だ納得出来ない様子で、しばし無言の睨み合いが続く。

…が、最終的に折れたのは寺井の方。

「…分かりました。ただし常に注意を怠らない事、約束ですよ？」

深い溜息をつきながら、寺井ちゃんはそう言う。

「分あってるよ。心配すんなって！」

それから色々と次の『仕事』について話し、店を出た時にはもう薄暗くなっていた。

R R R R ∴ R R R R ∴

普段あまり鳴ることのない家の電話が鳴り出す。

服部の帰った後、書斎に移動して読書中だった新一はその音に気付
き、迷惑そうに頭を上げた。だが、この時間を邪魔されるのが一番
嫌いな彼は、すぐに視線を本に戻す。

大事な用ならば携帯に掛かってくるだろう。それに、普段あの電話
は全くと言っていいほど鳴らないのだ。どうせ自分には関係のない
内容だ…。

そう思っただけで無視を決め込んだのはいいものの、電話のベルはいつま
でたっても鳴り止まない。

しつこい…

さすがに苛々してきた新一は、本を閉じると静かに立ち上がった。
彼の周りには明らかな不機嫌オーラが立ち込めている。

「…もしもし」

いつもより１トーン低い声で応対する。不機嫌な感情そのままに電話に出たのは、新一にはもう相手の見当がついていたからだ。

『やあ新一、やっぱり居たんじゃないか！父さんてつきり留守かと思っただよ』

受話器から聞こえる父、工藤優作の声。

嘘だな…

居留守だと思ったからこそ、あんなにしつこく鳴らしたんだろ？

「それで…？何か用なのか？」

敢えて突っ込まずにそう聞くと、来月には少し日本に帰ってくるとの事。

忙しかったのか、また連絡すると言い残して電話はすぐに切られたが、受話器を置いて書斎に向かう新一の顔には、先ほどまでの不機嫌な様子は微塵も残っておらず満面の笑みが浮かんでいる。彼を不機嫌にしたのは、父の“日本ではまだ出版前の自分の推理小説の新作を手土産に持ち帰る”という一言だった。

書齋に戻った新一は、読み掛けの本に手を伸ばす。すでに月は高く昇り、周りの家々の照明が一つ、また一つと消されている事に彼は気付いていない。

その日、辺りが明るくなるまで工藤邸の照明が落とされることはなかった。

疑念と思惑（後書き）

快斗さん疑われてます…。会った事がある気がするのに、それが何処で誰と会った記憶なのかがい思い出せない、そんな状況ですね。服部君のおかげで今回は『思い違い』ってことになりつつありますが。

夢を与えし者の手

大学生になって3日目。

そんな実感が沸かないのは、大学での生活が高校のそれと何ら変わりが無いからだと思う。退屈な授業も、窓の外から聞こえてくる音も、少なくとも今の所は…

ただ、一つだけ大きく変わったと言えるのは

自分を取り巻く人間の種類…だろうか？

4階の教室、その窓際の席に座って頬杖をついている快斗の視線が捕らえているのは…東才美術館。地名の入ったその名からも推測できる様に、西洋風に作られたその建造物は東才大学から程近い場所にあった。

結構大きい建物なんだな…敷地も広そうだし。まあその方が警備も手薄になるから、好都合なんだけど。予告状も出さなきゃいけないし、今日辺り下見に…

「何見とるん？ボーっとして」

「そりゃあ次の予……え？」

何の違和感もなく投げ掛けられた質問に思考が無理矢理中断された為、流れに飲まれて思わずとんでもない事を言いかけてしまい、慌てて振り向くと、

「おはようさん！」

ニカツと白い歯を見せて、朝の挨拶をする服部平次の姿があった。そして彼はそのまま当然のように快斗の隣に座る。

「……で？何見とつたん？」

「別に……何かを見てた訳じゃねえよ。ただ外見てただけ」

この状況で一番自然だと思われる返事を返すと、幸い彼は納得してくれた様で別の話題を持ち出してくる。

遅れて来たもう一人の名探偵もやはり当然のように服部の隣に座る。この席順にはもはや苦笑するしかなかった。

追う者と追われる者がこんなに近くにいるなんてありえねえよなフツ……

その後は、なかば半強制的に学食に連れて行かれたりしたのを除け

ば特に変わった事はなかった。
家に帰り、10分も経たないうちにまた出掛ける。行先は東才美術館…

入口は正面に一つ、関係者用の裏口と美術品搬入口。3階建てで屋上は…なし、窓は硬化ガラスだな。階段の場所は…

老人に扮した快斗は、建物の内外を隈なく目に焼き付けていく。どんな小さなモノも、その瞳から見逃される事はない。

ふむ…まあまあかな。

美術館から満足気な老人が出て来たのは、それから2時間ほど後の事だった。

「またキッドが予告状出したの!？」

東才大学の学生食堂。たった今大声を出して食堂にいる全員の視線を浴びたのは、快斗の持っていた新聞部のチラシを覗き込んだ中森青子である。号外と称されたそれには“怪盗キッド予告状”の文字。

突然の大声に、昼時でこつた返していた食堂内の騒音が一瞬消える。だが、朝から散々テレビで報道されていたので、周りの人間が驚く事はない。知らなかったのは、寝坊をしてテレビなど見ている余裕もなかった青子くらいものだ。

明らかに予告状を出した人物の事を快く思っていないような彼女の様子を見て、平次は、横にいる新一に小声で尋ねた。

「あの姉ちゃんはキッド嫌いなんか？」

探偵という特殊な立場にある自分達はともかく、あのエンターテイ

ナーに対して敵対心を持つ若者は珍しいと感じたから故の質問だった。

「ああ、たぶんあの子が中森警部の娘だからじゃねえか？」

同様に小声で返された答えに、成る程ね、と納得する。

あれだけ毎度の如く父親がやられとったら嫌いにもなるわな…

「キッドなんかお父さんがすぐ捕まえるんだから！」

そう言いながら、青子は快斗の持っていたチラシをひったくるとビリビリに破いている。

… あっちゃー、相当頭にきとるみたいやな。

平次は、苦笑しつつも先程からなぜか目が離せずに、斜め前に座っている彼らをずっと黙って観察している。

「バーロ！あんなへボ警部に怪盗キッドが捕まるかよ」

反論しながらチラシの切れ端を右手に集めていく快斗。欠片をすべて集めた彼は一度グッと右手を握り、すぐに開く。その瞬間、

……は？

箸を持っていた平次の手がピタリと止まり、快斗の手元に目が釘づけになった。見せ付ける様に青子の顔の前で振られた快斗の手には、折り目すらない元のチラシの姿。ビリビリに破かれた破片は一瞬にしてどこかに消え失せている。

何や今の…？いや、マジックなんやるけど。

自分はマジックの種を暴くのは得意な方だと思う。実際、以前マジックショーを観に行った時もほとんどのトリックの種明かしをしてしまい、和葉に怒られた事があるくらいだ。

それなのに…

唐突に目の前で行われた奇術、それに青子が驚く様子はない。つまりそれは、今のは彼らにとって日常的であるという事。

「黒羽ってマジックできるんやな」

何気なく呟いた言葉によって、和葉達の視線が快斗に集まる。

「え、そうなん？」

「わあ、見てみたい！」

場の流れで…というか、自分の一言がきっかけで始まった即席マジックショー。わずか数分の間に次々と行われた奇術、それなのにたったの一つもトリックを見破れなかった。

それは隣にいる東の名探偵も同じだったらしく、なんとも間の抜けた顔をしている。

「器用なもんやなあ…」

思わず漏れる感嘆の言葉。

最後にマジックで出した3本の薔薇の花を、快斗は蘭、和葉、青子にそれぞれ渡しショーを終了する。

「ハハ、キザな奴…」

その様子を見た新一は、少々呆れ気味な笑いを漏らした。

「アカン！英語のレポート忘れとった！」

急に隣から響いてきた大声に思わず耳を塞ぐ。

「つるせえな…何なんだよレポートって」

同じく耳を塞いでいたらしい逆隣りから抗議の声が聞こえる。

…ところで、だ。今は名探偵たちと一緒に6人で学校からの帰宅中、それはもういい。嫌だと言ってても青子が聞かねえだろうしな。ただ、気になるのはこの並び方。どうして俺は探偵に二人に挟まれているのか。落ち着かねえったらありやしねえ…

「なあ、黒羽も行くやろ？」

「は？…あ、ああ」

いきなり話を振られても何の事だかサッパリだ。なんとなく返事しちまったけど…どこに行くって？

「じゃあ決まりやな！」

「おい服部、何勝手に決めてんだよ」

「まあ、ええやん」

新一の抗議を軽くあしらい、平次はニカッと笑った。

夢を与えし者の手（後書き）

更新遅れ&進展なくてすみません（、（みつばの力不足でござ
います。

想像の見解

室内が、ほろ苦い香で満たされていく。

「あー、悪イ俺コーヒー飲めねえんだ…」

自分の前に置かれたカップの中身を見て、ある裏稼業を持つ甘党の大学生が申し訳なさそうに呟いた。

暖かな陽射しが差し込む部屋。その光に文字盤を反射させている大きなアンティークの時計が、午後3時を告げる鐘を鳴らした。学校の帰り道での話を聞いていなかった結果、快斗は今工藤邸でコーヒーを出されている状況にある。ここに来た理由が、明日提出の英語のレポートをやる為だというのも先程ようやく理解したばかりだ。

「苦いの駄目なのか？あとはこれしかねえけど…」

新一が、持ってきた紙パックの紅茶をコーヒーの横に置くと、快斗のすぐ隣から揶揄するような声が聞こえた。

「なんや、意外とお子ちゃまやのお」

「ほつとけ…」

ニヤニヤ笑う平次を、快斗はジト目で睨みつけるが、睨まれた当の本人は気にする様子もなく課題の準備を始めている。

課題の内容は、英語で書かれた本を読み日本語でレポートにまとめるというシンプルなもの。だが法学に関する専門書らしく、読みごたえのある一冊が課題図書となっている為、結構な労力を必要とするだろう事は目に見えていた。

誰ともなく自然と溜息が漏れる。

R R R R… R R R R…

程なく家の電話が鳴りだし、本に手を伸ばしかけていた新一の手が止まった。そしてその瞳に嬉々とした光を一瞬宿すと、すぐにパタパタとスリッパの音を響かせて部屋から出ていく。

しかし、廊下から話し声が聞こえてくる気配は一向になく、新一も戻って来ない。不審に思つて二人がそつと廊下を覗くと、そこには電話の前で何やら白い紙と睨み合っている彼の姿。気配に気付いたのか、こちらを振り向くと苦笑を漏らしながら近寄って来る。

「悪い悪い、今朝のうちに目暮警部にFAX頼んどいたんだ」

そう言つて新一が見せたのは、怪盗キッドの予告状。昨夜、警視庁に送られたものだ。中森警部ではなく敢えて目暮警部に頼んだのは、やはり二人の折り合いが悪いからなのだろうか。

「へえ…」

適当に反応する快斗。一方、東西二人の名探偵達はその暗号に大い

に興味があるらしく再び紙と睨み合いを始め、動こうとしない。

暗号の製作者がその様子を見てクスリと笑みを零した事に、気付く者はなかった。

「だーっ！！何なんや、この複雑怪奇な暗号は。ちょい、黒羽も知恵貸せや！」

十数分の間その場で紙と睨めっこをしていた平次が、来い来い、と手招きしている。

「……いやいや、俺には無理だって。それにやっぱ暗号は名探偵が解かないと……な？」

暇を持て余して課題の本を読んでいた快斗は思わぬお誘いに一瞬きよとした表情を見せたが、さすがに暗号解読に加わる訳にはいかないので丁重にお断りした。

「そもそもキッドってどんな奴なん？」

「…は？」

ようやく予告状を手放しソファ―に戻って来た平次が尋ねた相手は、快斗。この家主が先程ふらりと部屋から出ていってしまったからだった。

「アホみたいに真っ白い格好でキザったらしい台詞吐いとる泥棒やっちゅうのはもちろん知つとるで？…そやけど、アイツあんまり大阪に来いへんし。それに俺は泥棒なんかに興味あらへんかったんや」

せやから詳しい事は知らん、と付け加える様に弁解を始めた平次。

発言の節々に見受けられた聞き捨てならない言葉に顔を引き攣らせつつも、快斗は曖昧な笑みを返した。確かに彼の言う通り、『仕事』で大阪に行った事はほとんどない。…というか、学生という身分上あまり遠出がでなかつたというのが真実だ。時間も、お金もなかつた。そんな高校の時に比べれば幾分時間に余裕がある大学生となつた今、海外にも手を伸ばしてみようかなんて考えていた所だつたのだが。

…と、ここで彼の最後の言葉がひっかかった。

「なあ、興味が『なかった』って事は、今はあるのか？」

そう尋ねると、平次は人懐こい笑顔でくしゃりと笑う。

「まあ、そこそこな。工藤が負ける程の頭のええ泥棒となら対決してみたい気はするわ」

「バーロ！俺は負けてる訳じゃねえよ！」

絶妙なタイミングでドアからひよっこりと顔を出した新一が、間髪入れずに素早く反論した。そのままズンズンと苦笑いを浮かべる二人に近づいてくる。

「ほらよ」不機嫌そうに新一が差し出したのは表紙に“FILE 1412”の文字が並んだ薄紺のファイル。

「なんやコレ？」

「父さんが集めた犯罪ファイルの一つさ。それはキッド専用のやつ。まあ最後の方のページは俺が足したんだけどな」

びっしり埋められた文字と、新聞の切り抜き、予告状のコピーなどが丁寧にまとめられたファイル。

半分呆れ気味にファイルを見つめる快斗を余所に、興味津々といった感じでペラペラとファイルをめくっていた平次は『考察』と書かれたページで手を止めた。

「初めて現れたんは１８年前：やて？そんならもう結構なオッサンやないか！」

もつともな意見に、ソファアに座った新一が平然とああその事だけど、と答える。

「奴はまだ若い。はつきりと顔見た訳じゃねえけど、俺たちとそうは変わらねえと思うぜ？」

…やっぱりバレてるか。

新一の発言に、快斗の課題本のページをめくる手が一瞬止まった。

小学生だと少なからず油断していた初めての出会いは仕方ないにしても“江戸川コナン”には何度か近くで顔を見られている。まして慧眼を持つ彼のことだ、見破られていても不思議ではない。

「うちゅーことは、18年前のキッドと今のキッドは別人なん？」

「断定はできねえが、その可能性は大いにあるな」

「…ソレ警察には言っただんか？」

「いや、まだだ。それに証拠のない情報なんて言っつもりもねーよ」

そう言うと、新一はカップを口許に運ぶ。その瞳はまるで何かを待っているように楽しげに輝きながら西の探偵を写していた。

「怪盗キッドは…」

パラパラとファイルをめくっていた平次の、独り言とも取れる呟き。

「…キッドは何か探しとるんやるか？」

「どうしてそう思う？」

尋ねた新一の瞳は先程よりも楽しげに光を放っていて…

何やら話が良い方向に傾いている。そう感じた快斗は、そつと

課題本の影から彼らの様子を窺う。もちろん涼し気なポーカーフエイスは顔に張り付けたままに。

「さっきの工藤の話…、昔と今のキッドは別人うちゅう前提の話なんやけどな。もしそうならキッドには何か明確な目的があるんやないかって思たんや。それも二代目が現れるくらいいな」

大人しく話を聞いている新一をチラリと横目で確認し、平次は続ける。

「それとな、このファイルに残つとる資料によれば、盗んだモノをすぐに持ち主に返すうちゅう犯行スタイルは昔も今も変わつとらんそやから…」

「奴は何かを探す為に盗みを働き、目的のモノじゃないから持ち主に返してた。そう言いてえんだろ？それなら、最近奴が宝石専門に転向したのにも説明がつくしな…」

途中で言葉を切った平次の後を新一が続ける。

「せや。何らかの情報を得て、狙いの的が定まってきたうちゅうことやる？…って、工藤お前何笑つとるんや！おかしい所があったんなら言うてみい」

平次の視線の先にはクスクスと肩を震わせながら笑う友人の姿。ビシッと指を指されて、笑んだ顔はそのままに新一はカップを置いた。

「悪いな。別におめーを笑ったんじゃない。ただ、考える事は一緒だなあと思ったからおかしくてよ。不確かな情報で成り立つてる訳だから、こんなのは推理じゃねえ、ただの想像だ。なのに俺達は同じ答えを導き出した、おもしろいと思わねーか？」

つられて平次も口角をつりあげる。

「せやなあ。これが真実やって氣イしてくるわ」

探偵二人から発せられる不穏な空気。もはや自分の存在は忘れ去られているのではないかと疑念がわくほどに、快斗はこれ以上にならないくらいの居心地の悪さを感じていた。そんな彼に構うことなく、怪盗談議は終わる氣配を見せない。

「ほんなら工藤、キッドの活動範囲から何か氣付かへんか？」

何かに氣付いたらしい平次は、ファイルを手渡しながら問いた。

資料を手に考え込む友人を見て、更に付け加える。

「以前は海外での活動も多かったみたいやけど、今は海外どこるか

東京周辺に集中しとるやる？」

途端に、新一が口を開く。

「…成る程な。もしキッドが二人いると考えるなら、今のキッドは東京から離れる事ができない人物。東京に表の仕事を持ってるのか…学生って考えもあるな」

三人寄れば文殊の知恵、凡人でも三人集まって考えれば良い知恵が出るというくらいだ。才に恵まれた名探偵が二人集まれば知恵などいくらでも出るのだろうか。いつまでたっても追究を止めようとしない二人を一瞥し、これだから探偵ってのはたちが悪い、と快斗は誰にも気付かれないような小さな溜息を零した。

何が思う事があったのか探偵達は自らの思考の渦に入り込んでしまい、部屋に静寂が訪れる。

その静寂を破ったのは、突如部屋に響いた時計の鐘の音。時計の針はすでに6時を差していた。

「俺、もう帰るよ。家一番遠いし…」

そう言つてソファから立ち上がった快斗。その手にある課題の本が、振り返った二人の探偵に工藤邸に来た本来の目的を思い出させた。

「あ…そついや課題の事忘れてた」

「俺もや…」

「二人とも話に夢中だったもんなあ。俺はもう終わったぜ？」

顔の横で本を揺らしながらそう言つた快斗は、そのままマジックでパツと本を消して見せる。そして、そのままカバンを掴むとニツと笑う。

「じゃ、また明日な！」

そう言い残して快斗は部屋から出て行こうとする。

「黒羽っ…！」

それを呼び止めたのは新一。だが、快斗が振り向いた先に見た彼は困惑したような表情を浮かべていた。呼び止めた本人が困惑しているこの状況の真意を図りかねて、快斗が怪訝そうな視線を投げると、

「あ…いや、何でもない…また明日な！」

歯切れの悪い口調からは何も読み取れない。

というか寧ろ新一本人が、自分のとった行動に驚いている様にも見えた。問い詰めても無駄、そう瞬時に判断した快斗はそのまま工藤邸を後にした。駅までの薄暗い道程。思い出されるのは別れ際の工藤新一の奇行。あれは『何でもない』顔ではなかった。しかし自分の行動に不審な点があったとも思えない。

「…なんだかなあ…」

釈然としない思いは小さな呟きとなって闇に吞まれていく。

「どないしたつちゅーねん？」

飛んできた質問にハッと我に帰る。どうやら自分によく似た友人が出ていったドアをずっと睨み続けていたらしい。

その理由は分かっていた。黒羽がこちらに向けた笑み、それが自分の中の記憶の断片にダブったような気がしたからだ。だがそれがいつの記憶なのか、いったい誰だったのか…パズルのピースがうまく嵌まらない。それどころか、嵌まる筈のピースの繋ぎ目は全く別の形をしている様な、そんな感覚に陥ってしまう。

「…アイツ、これ本間に3時間で読み切ったんやるか？」

平次の弱々しい声色に、新一のぐるぐるとした思考は中断された。

「これ専門用語だらけで、ごつつう読み難いで？3時間なんて無理や…」

嫌そうに本を顔から遠ざけて顔をしかめている平次の手から本を奪い取った新一は、並んだ英文に目を通した。英語には多少自信のある新一の顔が徐々に険しくなっていく。

「服部…半分ずつ分けてやらねえか？」

「…せやな。そうでもせんと、寝られなくなりそーやし」

直後、工藤邸に二つの大きな溜息が落とされた。

想像の見解（後書き）

まず始めに　　大変長い間お待たせしてしまったことお詫び申し上げます。　　さて、今回の話の内容についてなんですが、新一の『繋がる筈のピースの形が』みたいな台詞。私の駄文では理解できない！という方の為に、補足説明をば。　　あれはですね、黒羽快斗と、新一の記憶の中で彼にダブる人物を^{つまりキッド}パズルのピースに見立ててるんです。同一人物な訳だからピースはぴったり嵌まる筈、けど昼間の彼は誰かさんの様なシニカルな笑みは見せないし、夜の彼は人懐こい笑みなんか作らない。そんな対極性が、二人が同一人物だという結論から新一を遠ざけてしまっんです。尤も新一はまだ、記憶の中の人物〓キッド　にたどり着いてませんが…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4738c/>

二つの光

2010年10月8日15時11分発行